

有島武郎研究

—著作集第七輯『小さき者へ』をめぐって—

宮野光男

有島武郎著作第七輯「小さき者へ」〔大7・11〕には、有島の初期から中期にかけての七編の作品が収録されている。ちなみに、それらの作品を列挙してみると以下のようになっている。

- ① 「An Incident」〔「白樺」大3・4〕
- ② 「幻想」〔「白樺」大3・8〕
- ③ 「小さき者へ」〔「新潮」大7・1〕
- ④ 「潮霧」(ガス)〔「時事新報」大5・8〕
- ⑤ 「「死」を畏れぬ男」〔「新時代」大7・3〕
- ⑥ 「動かぬ時計」〔「中央公論」大7・1〕
- ⑦ 「戯曲 老船長の幻覚」〔「白樺」明43・7〕

これを見ても明らかのように、これらの七編の作品の執筆時期には相当の時間の開きがある。そして、これらの作品相互の関係につ

有島武郎研究 —著作集第七輯『小さき者へ』をめぐって—

いても、例えば著作集第三輯「カインの末裔」〔大7・2〕のように、執筆時期としても、主題的にもその収録作品の間に密接な関係をみる事ができるものに比べると、それはより必然性に乏しいようにも思われる。しかし、作品の配列の順が単純に発表順ではないことから明らかのように、この集の編集についてはこれまでの著作集と同様に、相当意図的であるように思われる。このことは、換言すればより基本的な関係を収録作品の間に見出すことができる可能性を秘めているということにもなるのである。

有島は「『小さき者へ』広告文」〔大7・11〕において次のように述べている。

この輯には私の小品七種を集めた。ある物には私の経験が可なり直接に取り扱つてある。文壇の一部では芸術と云ふ事が出来ないと非難されたものだ。ある物には私から思ひ切り飛び離れた生活が私一個の批判の対象とし寓意の賓主として描かれてある。これは又文壇の一部から生命のない平写として非難されたものだ。私は然し恐れないで其等の作品を私の著作集の中に組み入れる。何者

私自身は是等の作品を恥ぢないからだ。而してそれは私の生活とはやはり分離する事が出来ないと思ふからだ……著者

著作集の中に収録されている作品に対する批評は同時代評から今日に至るまで、肯定的なもの、あるいは否定的なものと同様であるが、有島の広告文は、これらの作品が、エッセイ的なものであれ、より創作的なものであれ、生活とはやはり分離する事が出来ないVのものであると述べているように、有島の内面性と深く関わりをもった作品であることを明らかにしているのである。

勿論、この輯にも、これまでのものと同様に、エピグラフが付けられているということが、著作集としてのまとまりを考えるための有力な手掛りになることは、充分に考えられることである。それと同時に、エピグラフ解釈を通して、ホイットマン詩の一つを掲げることによって示した有島の、文学に対する基本的な姿勢を考察することもまた可能になるところであろう。

以下、著作集第七輯「小さき者へ」に収録されている諸編が、いかなる関係を持った作品であるのか、その統一的な主題が何であるのかを、この著作集に付けられているエピグラフとの関わりにおいて考察してみたいと思う。

二

「小さき者へ」のエピグラフとして掲げられているホイットマン詩は、「回転する地球の歌」のなかの一節、

最上の言葉を語るよりさらによいことがわたしには分かる、それはいつでも最上の言葉を語らずにおくこと。(8)「岩波文庫版(鍋島能弘、酒本雅之訳)「草の葉」(中) なお、有島訳はない」

である。

先にも述べたように、このエピグラフは、著作集第三輯「カインの末裔」に対する「アダムの子たち」のように、かならずしも収録されている作品に直接関係のあるものではない。むしろ、収録されている作品全体の統一的な主題と深く関わっているように思われるものなのである。

*

ホイットマンにとつて「地球V」とは、例えば、
「海がそつとさ
さやいてくれた逞しくも美しいあの言葉V、
「万物に優る窮極の言葉V」
「いつまでも揺れやまぬ揺籃のなから」を発するところ
の生命の根源、生命そのものなのである。その「地球V」を表現するに「ふさわしい言葉Vは、
「内実をそなえたV、
「まことの言葉V」
「回転する地球の歌」でなければならぬのは当然のことである。それは、
「人間のからだV、
「空気が、土、水、火Vであり、
「地球が語るあのもの言わぬ言葉V」
「同前」それ自体——つまり、
「日常の言葉V」
「仕事を賛える歌」などではない、
「活字によつては伝え得ぬ言葉V」
「回転する地球の歌」なのである。

耳に聞こえる言葉など今のわたしにはほとんど無意味、

万物が没入せんとて目ざすのは声にはならぬ地球のころを呈示する言葉、

地球のからだと地球にそなわる真理の歌を歌うひと、
活字には及びもつかぬ言葉の辞書を作るひと。〔同前〕

さらに続けて、ホイットマンは、先のエピグラフに掲げられた一節を歌っているのであるが、このところでホイットマンの歌い出していることは、表現論における一種の不可能性に対する発言、表現技法としての不可能の表明のように思われるのである。

最上の言葉を語ろうとしても、できないことを思い知るだけ、
舌が付根のところまでまわらなくなり、
器官に呼吸が従ってくれず、
わたしはやむなく啞になる。

△日常の言葉Vの拒否、それは△言葉よ、書物の言葉よ、お前たちはなにものだ、／もはや言葉は無用、耳をすまし目を見開けばこと足りるV〔「夜明けの旗の歌」〕というように、一面において言語不用論でもある。

しかし、問題は△最上の言葉Vによる最上の表現の不可能性なのであり、単純な言語不用論ではない。そして、その背後にはホイットマンの内部に潜んでいるものが問題になる世界がある。△男よあるいは女よ、ぼくは君がどんなに好きか話せそうだが言葉にならぬ、／ぼくの中に何があつて君の中に何があるかを話せそうだが、

有島武郎研究 ―著作集第七輯「小さき者へ」をめぐる―

言葉にならぬ、／ぼくの胸に燃えるこの憧れを、昼も夜もやむことのないこのぼくの鼓動を、ああほんとに話すことができたらなあV〔「ぼく自身の歌」〕という思いには、表現技法への不満よりも、内に満ちているものの充実ぶり、その表現不可能性に対するもどかしさが述べられているように思われるのである。

△靈魂不滅を信ずるVホイットマンにおける△永遠の生命を享受Vした存在としての認識は、ホイットマン詩のイメージの根源的な支えになっているのであるが、それを可能にするものが、△個の生命の延長ではなく、個の生命の繰りかえしであVり、それにあずかって力あるものが△性による誕生V、△宇宙の靈Vの△個性化Vであるといわれているが、このところには、ホイットマンによるキリスト教の神の無色透明化が見られるところであり、ホイットマンの内面を充実せしめるもの、もうひとつのものをみるこゝろがきるところなのである。

ホイットマンにとっては、その内面にあるものが、永遠に表現されぬままでいるというわけではなく、それは△正しい声V、△あらゆる言葉の中にまどろみながら永遠に番番を待つものを、引き出してやれる美質の持ち主V〔「声のひびき」〕の出現によって可能になる世界だと言ひ、△魂にはそれ自身の口から語られるものを除いて、いかなる教訓も説話も認めないという事実にみられるような、あの測り知れぬ誇りがあるV〔「草の葉」初版序〕のだから、それが可能なのは、△魂の語調と魂の言葉Vを持った存在によって実現することになるというのである。

これこそあなたの時、おお「魂」よ、言葉なき世界へのあなたの
自由な飛翔、

書物から離れ、芸術から離れ、昼は消え去り、日課も終わり、
今あなたは全身で立ち現れ、沈黙のうちに凝視し、あなたのこよ
なく愛する主題たちに、

夜に、眠りに、死と星たちに、じっと思いをひそめ。「雲ひと
つない真夜中」

ここに歌い出されている△言葉なき世界∇にこそ、表現者の魂と
表現されるものの魂との高次元における統合の可能性を見ることが
できるのである。

ここで再びそれを可能にすることができるのが、現実的にはいか
にして、だれによってであるかを問わなくてはならないのである。

一度は、△ばくの歌は言葉につくせる小道具ふせいを想い出させ
るよすがにあらず、／むしろ言葉にならぬ生命を、そして自由と解
脱とを想い出させる歌∇。「ばく自身の歌」と歌い出したホイッ
トマンであった。△語られぬ望み∇を求めて△探し求め見出ださん
とて走り進め∇。「語られぬ望み」と勧めのホイットマンでもあ
ったのである。そのための方法として△暗示∇を示唆したこともあ
る。あるいは、表現方法としての△単純さ∇を積極的に勧めてもい
る。「初版序」しかし、結論としては、ホイットマンは、

今後わたしは最上の言葉を語るような信念には一切かかわらず、

最上の言葉を語らにすおくような信念だけに心を向けよう。△回
転する地の歌」

と歌わざるをえなかつたのである。

なぜならば、△最上の言葉を語らずにおく∇ということが、いわ
ゆる△その日まで∇の意味であることを、しかも、成就すべき△そ
の日∇が、△魂の言葉∇を持つことの出来る日であることをよく知
っていたからである。

ホイットマンにとって、魂の完成する日の未知なることは、人間
存在の理想志向性、換言すれば、人間存在の未完成性を表している
と同時に、人間の不可解性をも表しているのである。

あるいはまた、△最上の言葉∇とは、今はこの世に無いものによ
って語られるべきものであるものの比喩的表現、換言すれば表現不
可能性の根本にあるものが、表現不可能性を本質とするもの（神、
絶対者）に関わっていることを知っているからだということにな
るのではないだろうか。その者との出会いのときに歌う歌は、

（あなたは、おお「自然よ」、自然力よ、なによりもわたしの心にか
う言葉をお持ちだ―そしてこれこそ自然力を表わす言葉（「中略」
どんな言葉もついに語ってくれなかつたことを、語り得ぬこと
を、今ここで語ってくれる使節、「日没の微風によせて」

というものなのである。

このところに、本来的な意味での△魂の言葉∇待望の姿を見出す
ことができるように思われるのである。勿論、それがホイットマン

にとつてもあらまほしき状況であることは、彼の晩年の詩編、「さ
ようなら私の空想」のなかの、

いったいどんなふうに言えたい、

一切の周期も、詩も、歌びとも、芝居もすんで、

誇りとされるイオニアの、インドのそれもーホメロスも、シェイ
クスピアもー長い、長い時間のぎっしりと無数の点で埋まった

道も、地域も、

輝いている星群と星たちの作る天の川ー「自然」のさまざまな脈

搏の刈り入れもすみ、

過去を想うすべての情熱、英雄、戦争、恋愛、崇拜、

窮極の深みにまで投げこまれたすべての時代の測鉛、

人間のすべての生活、咽喉、願ひ、脳髓、ーすべての経験の表現

もすみ、

長いものであれ、短いものであれ、すべての言語、すべての国に

数知れぬ歌が生まれ出たあとも、

なおも何か、詩歌の声でも活字でもまだ語られていないー何か

が欠け、

(たぶん最上のものがまだ表現されず、欠けており) 「表現さ
れぬもの」

が、よく物語っているのである。

結局のところは、

有島武郎研究 ー著作集第七輯「小さき者へ」をめぐってー

さようならわたしの空想ー(わたしには言わねばならぬ言葉があ
った、

しかし今はまだ言うべきときではなくーたとい誰の場合であれ、

言葉や言うべきことで一番いいのは、

適切な場所が現われたときに言われることーだから内にそなわる

意味のために、

わたしはわたしの言葉を最後のときまで言わずにおく) 「さよ

うならわたしの空想」

と言わねばならなかったホイットマンだったのであるが、 \wedge わたし
には言わねばならぬ言葉があった \vee とは、自己の可能性追究の果て
に見出すことのできる自己認識の内容の表現を、そしてまたその存
在を根底的に支えているものに与えられる究極的な表現を言い表し
ているものであろう。それを知りつつも、 \wedge しかし今はまだ言うべ
きときではなく最後のときまで言わずにおく \vee というところに、詩
人ホイットマンの姿を見ることができるよう思われるのである。

三

有島が著作集第七輯「小さき者へ」に、ホイットマン詩「回転す
る地球の歌」の一節をエピソードに掲げたということは、以上述べ
たような可能性をその表現論の背景に考えることができるというこ
ともなるのであるが、有島自身の表現論はどのようなものであつ
たのであろうか。以下、有島の、主としてエッセイを中心に考えて

みたいと思う。

有島もまたホイットマンと同様に魂を重んじる作家であったことは周知のことであるが、その魂の表現のためには、

自然は如何しても先ず人の言葉に翻訳されなければならないのだ。「ミレー礼賛」大6・3」

と述べている。

このところで言う「自然」とは被造物を意味していると同時に創造者そのもの「超自然的意志、すなわち「魂」の別称であるが、を意味していたことは既に述べたところであるが、そのような重要な役割を担わされた「言葉」であるにもかかわらず、有島は、ホイットマンと同様に言葉に対して基本的に、一種の不信感を抱いているのである。

私は魂をいひ表はす為めにもつと放胆な言葉を假りて来たいと思ふ位だ。何故ならば魂は今まで余りに惨めな言葉で翻訳されて来た為めに、人の心の中の魂の置場が云ひやうなくせ、こましい汚いものになつてしまつてゐるからだ。「草の葉—ホイットマンに関する考察—」大2・7」

それは、言葉の意味を表はす為めに案じ出された「V」ものであるにもかかわらず、その本来的目的から逸脱して「墮落し」て「心」

要求が言葉を創つた「V」ものであるにもかかわらず、「今」は物がそれを占有する「V」に至つてしまつてゐるからだといふのである。それゆゑに、人間が言葉に依存することは「無謀に近い試み」であるといふのが、有島の言葉にたいする一つの考え方なのである。「惜しみなく愛は奪ふ」大9・6」

ホイットマンがそうであつたように、有島もまた、「大きな尊い美しいものは暗示によつてのみ現はされる」「草の葉—ホイットマンに関する考察—」と云うように、「暗示」を重んじる者であつた。そのことについてはすでに述べたところであるが、「私は寧ろ言葉の周囲に漂ふ隈取りをも私の言葉と共に撰取して欲しく思ふ」「惜しみなく愛は奪ふ」といふ言葉のなかにその思いがよく顯われているのである。

「大きな尊い美しいもの」といふ表現は言葉によつて表現することのできないものひとつが、「愛」を本質とするところの人間性であることを、そしてまた、そのことを根源的に支えているものが、「愛」を本質とするところの「魂」—絶対者—であることをよく言い表しているように思われるのであるが、このところに、表現論におけるホイットマンとの等質性を見ることができているのではないだろうか。

勿論、このことは、「最上の言葉を語らずにおく」といったホイットマンの現状認識における否定の表現としての言語不信感と本質的に軌を一にしていることは言うまでもないことであり、あくまでも前進のためのステップ、完成をめざした否定であつたことはいふまでもないことである。そのことは、有島の言葉への思いのなか

に、これとは正反対の考え方があるところからも明らかなのである。例えば、次の用例がよくそのことを表わしている。

言葉といふものは本当に不思議なものです。あれは死んだものやうだが生きてゐますね。言葉には意志がありますね。糧に逆用しようと企てる人には言葉はどこまでも不従順だが、言葉をその内在的な力に於て受取り、それを素直に用ひようとする人に対しては、実に抜目のない、自動的な、忠実な、友達となつてくれますね。「雑信一束」大10・3

△あれはちやんと立派な生きものです▽「愛に就いて」大12・1」と有島がいうときに、言葉そのものはすでに超えられて、そのなかに△魂▽が見られているのである。△言葉といふものが、言葉でなくなり、電気のやうな力強い流れに変わり得るものだ▽「ホイトマンに対する一英国夫人の批評」大11・5」とは、ホイトマンの詩に触れたときのアン・ギルクリスト夫人の感想であるが、このところに、有島の言葉に託して語る魂の讃歌に対する共感を説きとることができるのである。

勿論、それは、真実に愛の人として生きようとしている人間への讃歌である。△一体世に完全なものはない▽「叛逆者」明43・11、というのが有島の世界観である。ホイトマンに関しても△彼は死ぬまで未完成品で終つた感がある▽「卅年前の来月の今日詩人ホイトマン眠る―草の葉」は彼が唯一の自画像―」大11・2」と、

有島武郎研究 ―著作集第七輯「小さき者へ」をめぐって―

その前進性を述べているが、有島自身をも含めて、優れた人間の基本的な条件として云われている△未完成▽性は、生きた言葉の条件でもあったのである。

△凡ての活動は結局自己を表現しようとする過程で▽「芸術を生む胎」大6・10」あり、△偉大なる芸術家△は△人類が共同に所有しながら気が付かないでゐた運命を強く鋭く握つて的確な表現を与へた人々だ▽「大いなる健全性」大7・8」と有島は言うのであるが、△表現は畢竟主体▽「自己の考察」大6・11」なのである。だから△私は言葉を鞭つことによつて自分自身を鞭つて見る▽「惜しみなく愛は奪ふ」という論理もまた成り立つのである。

有島の表現論は、理論としては「芸術について思ふこと」(大11・1)に詳しいが、要するに△外部的な印象によつて物に生命を与へようとする代りに、生命そのものの物を通しての直接の表現であらうとする▽方法が説かれているのである。そして、芸術が生命であるという意味で、その生命を生みだすもの、つまり△胎▽が問われるのであるが、有島はそれが△愛▽だといふのである。

芸術を生むものは愛である。その外に芸術を生む胎はない。真が芸術を生むと考へる人がある。然し真が生むものは真理である。真理は即ち芸術とはなり得ない。真が生命を得て動く時、真は愛じて愛となる。その愛の生むものが芸術なのだ。「芸術を生む胎」

有島の愛の論理の二面性については、さらに論を改めて考察しな

くはならないと思われるが、このところに、方法として△愛▽、本質としての△愛▽が説かれていることに留意しておかなくてはならない。そして、ホイットマンの表現論が△魂▽論であるのに対して、有島のそれが、さらに深められた愛の論理のなかに位置づけられているところに、その特色を見ることができるのである。

ところで、有島は、表現論の具体的な方法論として△シムボルー表象▽を取り上げて次のように述べている。

「この」自己表現に使ふ道具をシムボルー表象—といひます。

「内部生活の現象」大9・1」

表象とは愛が己れ自ら表現するための煩悶である。「惜しみなく愛は奪ふ」

一面においてそれは△道具▽なのである。と同時に△愛▽の顕現でもある。

先にも触れたように有島もまたホイットマンと同様に、言葉に於いてというよりはむしろ△言葉をその素朴な用途に於いて使用する人▽、つまり△個性が表現せられるために▽△自分ながらもどかしい程の回り道をしなければならぬ▽ところの△散文を綴る人▽△惜しみなく愛は奪ふ」であることに對して強い不満を持っていたのである。

そのことは、換言すれば、△一つの言葉にもある特殊な意味を盛り、雑たな意味を除去することなしには用ひることを肯じない▽と

ころの△詩に行く人▽「同前」に對する強い憧れがあるということであり、結局のところ、有島の表現論は詩人論においてその結果を見ることができるのである。

有島は詩人について、

詩人とは、その表現の材料を、即ち言葉を知的生活の桎梏から極度にまで解放し、それによつて内部生命の発現を端的にしようにとする人である。「同前」

と述べている。また、△乱れた絲のやうな生活の混乱をうち貫き、言葉をその純粹な形に立歸らせ▽「同前」ることの出来る存在だといふのである。

山田昭夫氏の指摘^(註5)にあるように、有島の△詩的言語▽をもつてする△真実の自己表現▽の可能性への提言—換言すれば△有島のリアリスト宣言▽は、△自縄自縛のディレンマを暴露せざるを得ない▽ものである一面を持っているのである。しかし、有島の言う詩人憧憬とは、本能的な生活者、愛の表現者志向の、いわば理想状況の具体化されたものをその内容に持っているものであるという意味で、かならずしも、散文作家對詩人という対立関係において捕らえられているのではなく、詩的言語と知的言語との対比の関係として位置づけることができるように思われるのである。

著作集第十三輯「芸術と生活」(大11・9)に付けられたエピソードが Poets to Come であることも、その意味では大變象徴的なのであるが、△表現さるべき最後のものは昔も今も異なることがな

いV「惜しみなく愛は奪ふ」にもかかわらず、その全ての可能性は詩人が持っていると言ひ、有島自身、八若し及ぶことなら詩人となりたい欲求を感じてゐます。私の内部生活がもつと緊張して来たならば、詩によつて自己を云ひ現はすより、よりよき手段はないやうに思はれますV「生活と文学」大9・8」という願ひを持つた存在であることを知るにつけても、最晩年のエッセイ「詩への逸脱」〔大12・4〕が、有島にとつてその文学論の集大成的存在であることもまた首肯できるところなのである。

有島の詩人論については、「詩への逸脱」をめぐつて論の結論で詳述しなければならぬことであり、今は、一種の確認事項として留めておかななくてはならないのであるが、有島が、著作集第七輯「小さき者へ」に、かのホイットマン詩をエビグラフに掲げているということは、根源的な意味において、詩人に対する非詩人、詩人性に対する非詩人性、完全な表現に対する未完成性という自己認識における否定性に対して、その回復の可能性追究の意志を見ることができると言えるのではないだろうか。もしそうだとするならば、この著作集第七輯「小さき者へ」に収録されている諸短編の統一テーマの追究や解釈の一つの可能性もまた、このところに見ることができるといふことになるように思われるのである。

四

著作集第七輯「小さき者へ」所収の諸編が持っている固有のテーマと、エビグラフ分析の結果との相互関係の考察については、それぞれの作品分析を通して追究されなくてはならないのであるが、今

有島武郎研究 — 著作集第七輯「小さき者へ」をめぐつて —

は許された紙幅の関係で他日を期するほかはないので、著作集全体としての概括的な位置付けのみに留めておくことにしたいと思う。

著作集第七輯に収録されている作品のなかで、一番新しいものは、表題作「小さき者へ」の外に、「動かぬ時計」、「死」を畏れぬ男」などがあるが、「小さき者へ」に関しては、たとえば読売新聞紙上の近松秋江の感想——八出産の光景を描いた所を読んで思はずふき出したと告白して居られるVというところであるが——のようなものもあつたようである〔「想片」大7・4〕が、そのほかはおおむね好評であつたようで、著作集それ自体も八御陰で「小さき者へ」も世に生れ出る事が出来た。前景気が非常にいいといふ事も嬉しくない事ではないV〔足助素一宛書簡、大7・11・10〕と言つてゐるのであるが、このときですら、有島の氣持としては、八秋江氏が思はずふき出したのは、私がああ的小品の中に、読者を十分に真面目にするだけの力を持つていなかつた証拠だといはなければならぬ。〔中略〕勝れた作品は、読者が如何に馬鹿にかかつても読んでゐる中に何時とはなく引き入れられて、批評的な態度を捨て、作中の心持ちで読者の心が充ち溢れるまでになるやうなものになければならぬ。そこまで行つてゐなければ、本当の芸術品といふ事は断じて出来ない。芸術家もそれ以下のもので満足してゐてはならないVと、眞の表現を目指すものとしての根源的な構えを、強い口調で述べてゐるのである。

当時の世評に対して有島は、八一月の小説の批評が大分あちこちで出てゐるがどれもこれもあんまり評判がよくない。馬鹿野郎奴、移り気な彼等はもう僕というものを飲み込んだと思つてゐるのだ。

そんなに易々と飲み込まれてたまるものか。V〔足助素一宛書簡、大7・2・3〕と述べているということは、有島にとつては、世評のよしあしということよりも、むしろ自分の表現の不充分さを鋭く感じなければならなかったことへの焦燥感をこの書簡のなかに見ることができるよう思われるのであるが、そうであればあるほど、過去を省み、未来に向かつて、完成を目指さざるをえなかった有島であったことが色濃く表わされているように思われるのである。

このときの有島にとつて、もっとも重要なことは、表現の完成ということであつたにちがいない。エピソードの、△最上の言葉を語らずにおくことVには、有島の密かな決意と期待とが忍び込んでいたのである。

このエッセイ「想片」の後半の部分で、倉田百三の「出家とその弟子」を読んで、△これこそ芸術だVとして、その感想を述べているところがあるが、有島が倉田に比して△倉田氏の足跡に従つて歩いて行く事がVできないものであり、△私にはまだ有り余る不平があり、憤怒があり、憎悪があるVと、人間的に劣つた存在であることを自認しなければならぬことを述べているのであるが、そのような状況にあつて、なお、作家であり続けようとしているのは、△私の煩悶を伝へVんがため、△幽かながら私が辿つて行こうとする煩悶から解脱への一路を白状したいためにVであるところ、有島の期待と決意とがどのようなものであつたかを具体的に知るることができるのである。

△私は大それた未成品だ。苦しみながらも私はそれ「不平、憤怒、憎悪」を如何する事も出来ない。それを毒飯のやうに吐き出し

てしまふまでは私は清いものになれないV〔同前〕という思いのなかには、△成就の遠い未来V〔同前〕を目指して進もうとする有島の意志とともに、△私には、「或る女」以外にも毒血がまだまだ抜け切れませんV〔野口幽香宛書簡、大10・1・4〕という「或る女」執筆動機の一つが、表現論の文脈のなかで、みごとに表明されているように思われるのである。

〔註〕

1 表題作「小さき者へ」評については本文中にていささか述べたが、例えば「老船長の幻覚」は、はやく足助素一によつて、有島のキリスト教信仰への懷疑と、札幌独立教会からの退会にともなう苦惱と混乱との影響があるとの指摘（「新潮」大6・9）があり、有島の内面性との本質的な関係が問題にされていたのであるが、発表当時の批評では必ずしも好評ではなく〔無署名「創作短評」明43・7〕以後、安川定男（「有島武郎論」昭42・11 明治書院刊）、瀬沼茂樹（「日本近代文学体系33」「有島武郎集」昭45・3 角川書店刊）、藤木宏幸（「有島武郎の戯曲」）「有島武郎研究」昭47・11 右文書院刊所収）各氏の評に見られるように、内抱している問題性は評価されながらも、作品評価としては△習作Vとしての限定をつけられたものであつたようである。また、ホイットマンとの関係については、吉田俊彦氏の「老船長の幻覚論―悲劇性の原拠―」（「岡山県立短期大学研究紀要第二十五号 昭56」）がある。

また、「幻想」については、瀬沼茂樹氏の△一種の自己反省を小説風に追究する、詩的幻想を主とした小説であるが、不出

来というほかはないVという紹介があるが、最近この作品を、
△二元的分裂に彷徨する自分の姿を、そのまま沈着に凝視す
るV、未完成の作品ながら、△もうひとり有島武郎の可能性
を秘めてゐるV△「星座」の作風と「幻想」は本質的に共通し
てゐると思ふV、という意見もある。「桶谷秀昭」もうひとり
の有島武郎「有島武郎全集八月報9V」昭56・4 筑摩書房刊
所収V

以上の論は、その一部分にすぎないが、いずれにもせよ評価
は揺れていることを知ることができるのである。

- 2 清水春雄「ホイットマンの心象研究」昭43・11 篠崎書院刊
- 3 「教会退会後の自然観をめぐって(二)」〔拙著「有島武郎の
文学」昭49・6 桜楓社刊所収〕
- 4 有島武郎研究―「詩への逸脱」をめぐって(四)―梅光女学
院大学日本文学研究第一四号 昭53・11 所収V
- 5 「「惜しみなく愛は奪ふ」註釈・補註」〔日本近代文学大系
33 「有島武郎集」昭45・3 角川書店刊〕